

《2015年1月 月例会報告》

小中高の体育の授業で サッカーをどう扱うか

—筑波大学附属小中高合同研究会を踏まえて—

中塚義実（筑波大学附属高校教諭／NPO 法人サロン 2002 理事長）

【日 時】2015年1月28日（水）19：00～21：00（その後「華の舞護国寺店」～23：30 ごろ）

注）いつもの「ルン」は内装工事中につき1月中は休業中

【会 場】筑波大学附属高校3F会議室（東京都文京区大塚1-9-1）

【テーマ】小中高の体育の授業でサッカーをどう扱うか—筑波大学附属小中高合同研究会を踏まえて

【演 者】中塚義実（筑波大学附属高校教諭／NPO 法人サロン 2002 理事長）

【参加者（会員・メンバー）9名】

安藤裕一（筑波大ハンドボール部 OB）、石原俊英（榊パルカ）、牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会）、竹中茂雄（FC 品川）、谷口昭彦（静岡産業大学）、名方幸彦（文京教育トラスト）、中塚義実（筑波大学附属高校）、森政憲（筑波大学大学院）、山下則之（(社)独日スポーツアカデミー協会）、

【参加者（未会員）5名】中山雅雄（筑波大学）、西山瞳子（筑波大学附属中学）、松田薫二・福田哲郎・漆間亜美香（日本サッカー協会）

注）参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません（ご本人の了解が得られた範囲で公開しています）

< 目 次 >

<参加者自己紹介>

1. 教育課程におけるサッカーの位置づけ
2. 筑波大学附属小中高の「三校研」
3. 附属小中高保健体育科の連携と「四校研」の発足
4. 2014年度のテーマ「サッカー」について
5. 小中高の公開授業
6. 高校の体育実技におけるサッカー

<参加者自己紹介>

中塚：理事長を務める中塚です。この学校の教員です。今日は小中高の学校体育でサッカーをどのように取り上げるかについて話題提供させていただきます。先週の土曜日（1月25日）に、第10回筑波大学附属小中高合同研究会がありましたので、その報告と、普段どんな授業をやっているのかということを紹介させていただきながらディスカッションできればと思います。初めての方も大勢おられるので、簡単に自己紹介をしてもらって中身に入っていきたいと思います。

西山：こんばんは。筑波大附属中学校で保健体育科の非常勤をやっている西山と言います。

森：こんばんは。筑波大学大学院のサッカー研究室の森政憲と申します。いつも中山先生にご指導いただいてサッカーの研究をしています。僕は私立の中高で体育の講師をしていますので、今日は色々なことを学ばせていただけたらと思います。本日はよろしく願いいたします。

中山：筑波大学の中山です。先日の合同研究会では研究協議会の講師としてお招きいただきました。学校体育でのサッカーの取り組みには以前から興味があり、JFAの「小学校体育サポートプロジェクト」にも関わっています。良い体育の授業が筑波大でできたらということを願っています。よろしく願いいたします。

名方：NPO法人文京教育トラストの名方と申します。今もやっているのですが、かつて少年サッカーを、この学校の隣の公園でやっていたときに中塚先生と出会い、それから十何年です。よく皆さん頑張っているなど。いまは「文京ラグビースクール」というのを立ち上げ、私が副理事長ですが、筑波大学附属高校のグラウンドをお借りして月に3回ぐらい、ここだけじゃなくていろいろなところでやっています。幼児から小学生まで見ていて、色々な問題が出てきています。参考になるお話を聞ければと思い駆けつけました。よろしくどうぞ。

谷口：静岡産業大学の谷口です。僕の研究分野は経済学で、スポーツとはちょっと関係がないのですが、経済学でスポーツをやってみようと、こちらのサロンに参加をしております。あまりに長く来ていませんでしたので、行かないと怒られるかなと思って今日はやって来ました。よろしく願いします。

松田：日本サッカー協会のグラスルーツ推進部の松田と申します。昨年5月15日に日本サッカー協会（JFA）のグラスルーツ宣言が出まして、今年の1月1日からグラスルーツ推進部が新たにできました。その部長をしております、いつでも、どこでも、誰でも、気軽にスポーツが楽しめる環境を作るという、非常に幅が広いテリトリーです。障がい者も含め、楽しめる環境を作っていこうということです。色々やりたいことはありますが、まずはいろんな現場の状況を知って、日本全国それぞれに状況が違ふと思いますので、どこかで何か、こうやったら楽しめるっていうことをやって、また全国に発信していきたいなど。そういう意味で勉強している最中ですので、こちらに参加させていただきました。ぜひいろんなヒントをもらえればと思います。よろしく願いいたします。

福田：JFAのグラスルーツ推進部の福田と申します。よろしく願いいたします。

漆間：同じくグラスルーツ推進部の漆間と申します。よろしく願いいたします。

中塚：今日の話は、小中高の体育の授業でサッカーをどう扱うかということです。ところどころ意見交換の時間をはさんで進めて行きたいと思います。

はじめに大雑把なところ押さえておきたいと思います。次に、「四校研」という言い方をしていますが、筑波大学の附属小中高では大学と連携しながら、すべての教科で一貫指導のあり方を考え、実践する場を設けています。そのあたりの話を少しだけさせてもらいます。その上で映像を見てもらいながら公開授業の様子を振り返りつつ、意見交換させてもらいます。最後はうちの学校の高校生の様子です。サッカーでどんな授業をやっているのかを、これも映像を見てもらいながら意見交換できたらなと思います。

1. 教育課程におけるサッカーの位置づけ

ここに学習指導要領解説を持ってきています。学校関係者以外はあまり見ることはないと思いますが、こういうものを踏まえて各学校で教科ごとに年間計画が作られるわけです。いま動いている教育課程にはいくつか新しい考え方が盛り込まれています。学校制度はご存じのように6-3-3制ですが、体育科のカリキュラムは12年間で4-4-4に分けて再構成されています。小学校1年生から4年生までの立ち上がりの4年間は、各種の運動の基礎を培う時期とされ、小学校5～6年から中学1～2年までが多くの領域を学習する時期です。武道もダンスも必修になり、学校関係者が大騒ぎしていたのがこの時期の話です。そして中3から高校3年生までの4年間は、少なくとも一つの運動やスポーツを継続して楽しめるようになるという時期です。選択実技が大幅に取り入れられています。学校によっては自分の好きな種目しかやらないぐらいの勢いで体育が構成される可能性もあるわけです。

このことをもう少し詳しく、業界用語でまとめたものが下のものです。小中高の領域等の構成です。

| 12年間の指導内容の系図 | | | | | | | |
|---------------|---------|-------|-----------------|----|------------------------------|----|------|
| 小学校 | | | 中学校 | | 高等学校 | | |
| 1・2年 | 3・4年 | 5・6年 | 1・2年 | 3年 | 1年 | 2年 | 3年以降 |
| 各種の運動の基礎を培う時期 | | | 多くの領域の学習を体験する時期 | | 少なくとも一つの運動やスポーツを継続できるようにする時期 | | |
| 体づくり運動 | | | 体づくり運動 | | 体づくり運動 | | |
| 器械・器具を使った運動遊び | 器械運動 | 器械運動 | 器械運動 | | 器械運動 | | 器械運動 |
| 走・跳の運動遊び | 走・跳の運動 | 陸上運動 | 陸上競技 | | 陸上競技 | | 陸上競技 |
| 水遊び | 浮く・泳ぐ運動 | 水泳 | 水泳 | | 水泳 | | 水泳 |
| 表現・リズム遊び | 表現運動 | 表現運動 | ダンス | | ダンス | | ダンス |
| ゲーム | ゲーム | ボール運動 | 球技 | | 球技 | | 球技 |
| | | | 武道 | | 武道 | | 武道 |
| | | | 体育理論 | | 体育理論 | | |
| | 保健領域 | | 保健分野 | | 科目保健 | | |

佐藤豊、体育の新しい方向(今次の改訂の要点)、『保健体育科教育法』、大修館書店、2009

「体づくり運動」というのは、小学校の低学年からずっと高校卒業するまで体育の根幹としてやっていきたいと思います。この「体づくり運動」の中身が「体力を高める運動」と「体ほぐし運動」です。ほぐれていない青少年が増えてきたから、「体ほぐし」という活動を学校でするようになりました。前の学習指導要領から入ってきました。本来私たちが子どものころにやっていたような外遊びを体育の授業でやりましょうというようなものです。あとは器械運動、陸上競技、水泳、球技、武道、ダンス、そして体育理論と保健。

体育理論は中高で必修です。今次の改定から、高校では各学年6時間ずつ必ず体育理論、つまり教室で学ぶ体育の授業をやることになっています。保健も小学校3年生から高校の2年生までやることになっています。

ここで我々が話題にしようとしている「サッカー」がどこに位置づけられるのかというと、「球技」の中の「ゴール型」に、サッカー、バスケットボール、ハンドボールなどが含まれます。ゴール型の中で、サッカーは例示種目の一つとされています。絶対にやらないといけないわけではなくて、こういうのできるよという形で例として挙げられている種目になっているのだということです。前の教育課程までは、サッカーは全員必修だったんです。小学生も。しかし今回の改訂から、ゴール型、ネット型、ベースボール型となって、ゴール型の中から何かを選んでくれたら良いと。こうなっているわけです。

| 小学校 | | | 中学校 | 高校 |
|---|--|--|-----------------------------------|--|
| 1・2年 | 3・4年 | 5・6年 | 1・2年および3年 | 1・2・3年 |
| ゲーム | ゲーム (易しいゲーム) | ボール運動 (簡易化されたゲーム) | 球技 | 球技 |
| ボールゲーム | | ゴール型 | | |
| ①ボール遊び ②ボール投げゲーム(的当てゲーム、シュートゲーム、ドッジボール) ③ボール蹴りゲーム(的当てゲーム、シュートゲーム、キックベースボール) | ①手を使ったゴール型ゲーム(ハンドボール、ボートボール) ②足を使ったゴール型ゲーム(ラインサッカー、ミニサッカー) ③陣地を取り合うゴール型ゲーム(ラグラグビー、フラグフットボール) | ①バスケットボール ②サッカー ③ハンドボール ④ラグビー、フラグフットボール | ①バスケットボール ②ハンドボール ③サッカー | ①バスケットボール ②ハンドボール ③サッカー ④ラグビー |
| 鬼遊び | | ネット型 | | |
| ①一人鬼、二人組鬼 ②宝取り鬼、ボール運び鬼 | ①ソフトバレーボール ②プレルボール | ①ソフトバレーボール ②プレルボール | ①バレーボール ②卓球 ③テニス ④バドミントン | ①バレーボール ②卓球 ③テニス ④バドミントン |
| | | ベースボール型 | | |
| | ①ボールを蹴って行うゲーム ②手やラケットなどでボールを打ったり、止まったボールを打ったりして行うゲーム | ①ソフトボール ②ティールボール | ソフトボール | ソフトボール |

学習指導要領解説をもとに作表(2015、中塚)

サッカー協会も危機感を抱き、小学校の体育サポートプロジェクトを、中山先生もメンバーに入って進めて来られ、『サッカー指導の教科書』という本にまとめられたということです。例示種目の一つになってしまったけど、サッカーをちゃんと学校でやってよということを、JFAとして働きかけているところであります。ここまでのところで補足、質問がもしありましたら。

参加者：いま、4-4-4何とおっしゃいましたか？

中塚：4-4-4です。学校制度は6-3-3ですが、体育では4年刻みぐらいの方が実態に合うと

いうことを僕らも実感としています。小学校の高学年は、小学校の中学年や低学年と全然違います。中学でも3年生ぐらいになると高校生と同じくらいだと考えてもいいけど、1～2年生は小学生が大きくなったぐらいかなあという印象です。もちろん個人差は大きいのですが、中山先生から何か補足ありますか？小学校体育サポートプロジェクトのあたりで。

中山：先生のおっしゃるとおりです。いずれにしても、サッカーが体育の教材でなくなっちゃうと、サッカーしなくなる人が増えてくるんじゃないかというのが一つの危機感としてあります。もちろんサッカーだけの独り勝ちを目指しているわけでは決してなくて、スポーツ教養というか、スポーツの教育というのを学校体育がしっかり担わないといけないということです。グラスルーツとかそういうところで、保護者の方々が子どものスポーツを応援しているところをよく見ます。しかしあまりにもスポーツをよくわかってないと感じます。特に球技では、やれいけ、それいけ、みたいな応援しかありません。学校体育の中で、もっと多くの人たちがスポーツって、球技ってどういうものなのかを学んでいけばもっと良くなるんじゃないかと思います。こういうことを競技団体が偉そうに言うのはよくないので、「サッカーはこういう考え方でやったらどうですか」というのが今回作成した本です。表向きはサッカーがなくなっちゃう危機感もあるので、先生たちお忙しいのでぜひ使ってみてくれませんかというところから入っていったらいいと考えています。ただ一番大事なのは、学校体育でもうちょっと多くの人たちが、特にボールゲームの理解を深めるようなカリキュラムを真剣に考えていかないとダメなんじゃないかということです。

中塚：というのが大きな背景にあるということです。

2. 筑波大学附属小中高の「三校研」

さる土曜日に、筑波大学附属小中高の合同研究会がありました。「筑波大学大塚地区四校研」という書き方しています。

ご存じのように、筑波大学は東京高師～文理大～東京教育大学の流れを汲む学校で、茗荷谷の駅前の、いま筑波大学東京キャンパスや文京区スポーツセンターになっているあたりがもとあったところでした。初代蹴球部長の中村覚之助を中心に、雑木林を開拓してグラウンドをつくり、日本で最初に本格的にフットボールのトレーニングを始めたのも、文京区スポーツセンター前の、あの公園の辺りです。高等師範附属の頃から、附属小学校はあの裏側にあったし、附属中高もあの敷地内にありました。

そのような関係で、附属と大学が一体化して展開してきたのですが、戦前、中高だけいまのところに移ってきました。それでも近くにあるということで、教育実習をはじめ、大学と附属はかなり濃い関係にありました。

それが、筑波大学が茨城県の大学になってしまい、そして附属との関係も疎遠になってきます。

一方、大塚地区に残った小中高では、教科グループごとに研究会が行われていました。体育だけではありません。附属小出身者が附属中に来て、附属高校に来るという連絡進学制度があることで連携を取り合っていたというのはあるでしょう。また、せっかく12年間通して見ることができる良いフィールドがあるので、志の高い教科は研究的に色々なことをやっていたのです。

じゃあ保健体育科はどうだったかというと、私が着任したのは1987年ですが、それまで各学校におられた偉い先生が退職されたり異動されたりして、少しずつ代替わりが進み始めたころだと言えるでしょう。それでも小学校体育のドンみたいな人や、中学・高校でも我が道を行く人とかがおられ、年3回、その頃は小中高の「三校研」と言っていました。教科グループごとの研究会は何かピリピリしたムードが漂っていました。

3. 附属小中高保健体育科の連携と「四校研」の発足

1) 各校の実践を紹介していたころ

少しずつ、附属小中高の体育の教員の代替わりが進み、互いに飲みながらいろいろ話をするようになり、徐々にムードは和らいでいきます。そして三校研でももう少しお互いがやっことを紹介し合おうということになり、授業の映像をお互い見せ合うようになりました。中学校は同じ敷地なので、だいたいわかっていたのですが、小学校の取り組みは新鮮でした。でこういうことやっている児童が上がって来るのかという新たな発見です。また逆に、高校の映像を見せると、小中の先生は、自分の教え子の成長する姿を見ることになります。ざっくばらんな意見交換をする場ができてきたんです。

そういう中で、体育で12年間を通したカリキュラム作りができないかという発想が、教科グループの中から主体的に出てきたんです。

毎回お互いの映像を見せ合うのは、自分たちの勉強としてはいいけれど、一話完結型で消費してしまうのはもったいない。「三校研」で話していることを書き物にして残し、外向けに発信することはできないかと。けど我々も日常生活に追われているのでなかなか余裕はない。何とかするには「追い込まれる形」に持っていくしかないのではないかと。

2) 「月刊体育科教育」での連載(2004年度)

「月刊体育科教育」は大修館書店が発行している、体育教師が読む唯一の雑誌といえるものがあります。その誌上で、毎月連載させてもらえないだろうかということになりました。とにかくノルマが与えられないとやらないので、ノルマを課してもらおうと。

編集部に分たちの考えを伝え、半年間の連載をさせてもらえることになりました。2004年4月号からです。たまたま、その前年の11月号に「小中高の連携」というテーマで私が書くことになって、その流れで決まり、それまでためていたのを小出しにして半年間の連載を終えようとした頃、「おもしろいので1年間続けてみませんか?」と言われ、後半6カ月も続けることになりました。半年分はイメージができていたから簡単なんです。けど後半の半年分については、新たな切り口が必要です。そこで皆で集まってどの湯女切り口で連載を続けるか、各回のまとめ方をどうするかなどについて、担当者で何度も集まって話をしました。例えば、「走る」というテーマで小中高が書くとしたら、小中高の先生で集まってディスカッションする場が必要になってきます。後半戦を準備するところで、今まで以上に小中高の教員がコミュニケーション取るようになり、結構腹を割った話ができるようになりました。

附属小の山本先生。いまは十文字大学に移っています。附属中学の内田先生。いまは東海大です。そして高校は私が音頭取りになって、だいたいその3人でしょっちゅう飲みながら、話をぐいぐい進めていたのが、このころの話です。

3) 合同研究会の開催(2005年度以降)

連載の最終回は座談会です。12月はじめにあった附属高校の研究大会のあとに開きました。

それも終わって打ち上げに行ったとき、「中塚さん、これ次、どういう風に続けるの?」と。だいたい飲み会で物事が進んでいくものです。「せっかくここまでやったのだから、次は合同の公開授業じゃないか」ということになって、「そうだ公開授業だ」と盛り上がり、附属小中高の保健体育科合同研究会が2005年度からはじまりました。

ちなみにこの2004年度というのは、学校制度的にいうと国立大学が法人化したときです。筑波大学も国立大学法人となり、附属学校の存在意義を明確にするためにも、大学を含めた「四校研」が確立しました。附属小・中・高を抱える大学であるということは、それらの存在意義を踏まえ、社会に対

して発信していかなくてはなりません。このようなリクエストが大学側からあり、我々が地道にやっ
て来たことが王道に乗っかる形になったわけです。

2005年度からは毎回、ここに挙げているテーマで公開授業をやっていました。私も何度か公開授業
をやりました。第1回目の「体づくりと動きづくり」ではトレーニング単元を、2011年度の第7回で
はマット運動の授業を担当しました。ほんとうは最初からサッカーをすごくやりたかったんですが、
サッカーやるからには、それなりの準備をして面白いものにしなないとなあという欲もあって、ようや
く10回目にサッカーを研究会で取り上げてもらうことになった次第です。

- 第1回 2005年度 (H17) “体づくり” と “動きづくり” を中心に
- 第2回 2006年度 (H18) バレーボール型ゲームを中心に
- 第3回 2007年度 (H19) 基本の運動・ダンスを中心に
- 第4回 2008年度 (H20) 「じゃれ合う」から「組み合う」を中心に
- 第5回 2009年度 (H21) 『走る』: 速く走る動作の習得を目指して
- 第6回 2010年度 (H22) ゲーム・球技領域 ゴール型
- 第7回 2011年度 (H23) 器械運動(マット運動)を中心に
- 第8回 2012年度 (H24) 攻撃を楽しむネット型・バレーボールの授業
- 第9回 2013年度 (H25) 投げる動作の習得に向けて授業づくり
- 第10回 2014年度 (H26) ゴール型「サッカー」の授業づくり

4. 2014年度のテーマ「サッカー」について

今年度、サッカーの授業を取り上げるにあたって、授業担当者で何回か集まって話をしました。

まず各学校でサッカーがどのように取り上げられているのかを紹介しあいました。その上でどのよ
うな切り口で取り上げるかということを議論しました。

ここでは附属小中高でサッカー単元がどういう風に取り上げられているのかということだけ押さ
えておきたいと思います。

高校の年間計画をご覧ください。うちの体育の進め方は結構おもしろくて、単元が変わると担当教
師が変わるというスタイルです。例えば、1年1、2組男子。入学して最初は「オリエンテーション、
リハビリ、測定」ってなっているけど、だいたい10時間ぐらい高校の体育の導入みたいなことやって、
その中でトレーニングのイロハの話をしながら体力測定をやり、そして第二期のところでサッカー単
元に突入します。ここは教育実習生がごっそりやってきて、だいたい僕らの授業時間のうち9時間ぐ
らいもっていかれてしまいます。その後の修復に手間取ったりすることもあります。被害を最小
限に食い止めるために、最近はこの9時間はこういう中身でやってくれというのをこちらで示すよう
にしています。第二期と第三期のあたりに水泳の授業も入ってきます。第三期(9月)のところに「ス
ポーツ大会」って書いてありますが、球技大会ですね、それに向けての選択授業。男子はクラスごと
にバレー、バスケ、サッカーのチームを作って活動します。女子はバレー、バスケ、フットサルです。
クラスごとにチームを作って練習する期間。そして第四期に柔道を鮫島先生が、第五期に陸上を征矢
先生が、第六期にバスケを貴志先生が、男子はそういうことです。女子の1年1、2組バスケが夏休み
前にあって、ハンドボールがあって、体操、これはマット運動ですね。ちょうど来週から1、2組女子
のサッカーの授業が中塚担当で始まるわけです。

全部見てもらうと、1年生のところに男女ともに必修のサッカー単元があります。2年生にサッカー
はありません。3年生でもう一回出てきますが、これは選択実技です。夏前にバレー、バスケ、サッ
カー、テニスから生徒は選択し、男女共習で授業を行います。後期の第四期は種目名が書いていませ

んが、ここは、これまで体育の授業であまりやってこなかった種目を生徒自身が選んで、自分たちで仲間集めをして講座を立ち上げます。今年は「走り高跳び」の講座ができたり、「ボクシング」の講座ができたり。なぐり合うわけではありませんが、ミットをつけて「ボクササイズ」をやっていましたね。過去にはセパタクロウをやったこともあります。高校はこんな感じです。

附属中では女子が2年次の1、2月、ちょうど今ごろやっています。そして男子は中3の5~6月。これも教育実習生が半分くらいやっています。全員必修で男女別です。中学の場合は一クラス20人のサイズで授業をやっています。小学校は低学年と高学年に分かれています。低学年ではボール蹴りゲームとしての卵割りサッカー、高学年では通常のサッカーをやっているようです。

ここまでで質問はありますか？

中山：附属小ではサッカーをやらないと、研究協議会で言っていました。

中塚：高学年では担当の先生によるって言っていましたね。サッカーをやる人もいるけど、そうじゃなくてタグラグビーやる人もいるようです。つまりゴール型というくくりの中で何かを取り上げる。ただ低学年の「卵割りサッカー」は全教員がやっているようですね。

参加者：今おっしゃった、小学校でサッカーをやらないのは特に理由があるのですか？

中山：サッカー以外の教材の方がたぶん先生たちが教えやすいからです。

中塚：一つには、個人差がものすごくあるのがネックなのだろうと思います。それと、たとえばゴール型で習得させたい戦術的な能力が、ミスの多いサッカーだと獲得できないと、小学校の先生たちが思っているわけですよね。ゲームをやらせるとみんなワーって盛り上がるからいいけど、果たしてそれで学校体育の学習が成り立っているのかということ、真面目な先生ほど悩むのです。

参加者：10人いればどこに合わせるかという話があるじゃないですか。だいたい下の二割、上の二割、真ん中六割っていう。そういう場合はどうされているのですか？ 昔は真ん中ぐらいに合わせれば、だいたいみんなが付いてきた。リーダーも二人ぐらいいれば、サポートができて、クラスの運営ができてみたい話を聞きますけど。教育的には真ん中に合わせるということですか？ それともできる人に合わせるとか、下の人をフォローするとか、そういうのは何かあるのですか？

中塚：どんな教材でも、苦手な子はいます。体育教師としては、苦手な子をケアせざるを得ないというのはありますね。けど苦手な子ばかり見ていると面白くなくなってくるし、勢いがなくなってくるんです。だからできる子には次に行かせるような感じで、次の課題をどんどん与えます。個人差の問題は学校体育の中で一番大きいと思うんです。その話はまたあとで出てくると思います。

5. 小中高の公開授業

では映像を見ていただきます。「第10回筑波大学附属小・中・高 体育・保健体育科合同研究会」。小学校は保健体育科と言いません。体育科。中高は保健体育科なのでこういう言い方になります。

1) 小学校 … 「ドラキュラ・たまごわりサッカー」

まずは小学校の卵割りサッカー。小学校3年生です。附属小学校の体育では、みんなノートを持ってきます。そして授業の最初に、何回目の授業で、何月何日で、今日はなになにをやるのかをちゃん

と書いているんですね。だから学習の場なんです。参観者は130人だったかな。

附属小学校の授業は必ず一授業、二単元です。例えば、鉄棒の授業を40分間ずっとやることはありません。前半鉄棒を20分やったら後半はかけっこをする。鉄棒をずっとやっていたら、手の皮がずるむけますよね。長時間やると飽きも来る。むしろ期間を確保したい。そうすると体育の授業で動機づけられた子が、休み時間に鉄棒をやって上手になっていく。だから期間の確保を重視して、複合単元で進めています。

この日の公開授業も、45分授業のうち、前半は「ドラキュラ」と名付けた鬼ごっこ、後半卵割りサッカーというゲーム。何でこうしたのかというと、「ドラキュラ」は、鬼にタッチされずにこっちから向こうまで駆け抜けていくゲームなんです。帽子の色を紫にしているのがドラキュラで、そいつに捕まらないように駆け抜けていこうという「ごっこ遊び」です。スペースを見つけるわけですね。ゴール型で要求される状況判断力やフットワークをこの遊びの中で身に付けようということです。戦術学習なんです。ありがちだけど、ぶつかって泣く子も出てくるわけです。終わりのほうになると、ドラキュラの方が増えてきます。そこをいかにすり抜けるか。転んでいる子はビエーンと泣いていますね。それに、「外へ出たじゃないか」とか「ゴールインしたら取ったらダメだぞ」というのがあちこちで始まるわけです。

次は卵割りサッカーと名付けたゲームです。これは小学校低学年向けのゲームです。連続PKみたいなものです。コーンの間にボール通したら1点。あの円の中で守備側が守っているわけです。ちょっと空気を抜いたボールでバーンっと蹴って。みんな交代でボールを蹴る。みんなが等しくボールを蹴ることができるという、そういう趣旨のゲームです。ラインが三本あるのは、近いところから蹴ると点数が低い。僕はいつも「この子ら偉いな」と思うのは、ちゃんと計算できるんですね。自分たちの得点を。

小学校の体育の教材、蹴る型の教材として「卵割りサッカー」はメジャーな部類なのかな。筑波大附属小の発信力ってすごいわけで、附属小の研究会に来て、これをやっている。そうか、蹴る動作の習得に卵割りサッカーだということ、地方に行くとこれをやっている先生が多いと聞きます。もともと附属小にいた林先生という方が考えたゲームなんですけど。あとの研究協議でも出てきますが、お休みの時間がすごく長いんです。ずっと通して数えてみると、一人8回から10回ぐらいしかボールを蹴ってない。だけど逆に言うと、研究協議会でも授業担当の先生が言ってたけど、みんなが等しく8回から10回ボール蹴れているということに意味があるのだと。普通にサッカーのゲームやると、ボールに触らない子は全然触らないで終わってしまうけど、これをやることによって蹴る動作をそれぐらいは少なくとも経験できるわけで。そういうメリットを語っておられました。

中の四人にも戦術があるようなのです。横にフラットで並ぶよりも、良い守り方があると。この映像は横フラットになっているゾーンディフェンスのスタイルですね。だけど、前後に並ぶところも出てきているし、こういうゲームでも考えれば色々な要素を込めることはできます。

この映像を見て何か感想でも、どうでしょうか？

参加者：これ小学校3年生ですか？

中塚：これは3年生です。通常は2年生の教材としてやっているそうです。最初に説明に時間がかかっていたのは、1年ぶりにやるので、どんなやり方が確認してたんですね。最後は例によって、学習ノートに記録して授業が終わるという形です。

2) 中学校 … 「マイチームルールで楽しむストリートサッカー」

次は附属中の授業です。担当されているのはダンスがご専門の女性教諭で、中2女子の授業です。

生徒の数が少ないと感じられるでしょう。附属中では40人クラスで男女別で授業をやっています。だから女子だけの20人ほどの授業となります。中学はこのような形で2~3年次の授業をやっています。教師と生徒の人間関係ができていて、アットホームなムードが伝わってくると思います。

中2女子は1月から授業が始まって、この授業は4回目です。全部で10数回やるそうです。私は中2の最初の授業も参観していたのですが、「小学校の頃サッカーやったことある人」って先生が聞いたら、一人もいなかったんです。けど附属小から上がってきた子は、卵割りサッカーをやっているわけですよね。けど卵割りサッカーを彼女たちはサッカーとっていない。先生の方から「卵割りサッカーやったでしょ」って言ったら、「あれサッカーだったんですか？」って言い方をしていました。

授業計画を立てる際に、担当の先生ともいろいろ相談しました。とにかくいっぱいボール触らせてやってくれと。触れば触るほど上手になるし、ボールに触らないと話にならないからと。それと、「難しく考えることはないから、ストリートサッカーをやるとよいだらう」と。適当にゴール(コーン)を置いて、その場でお互いルール決めてやれば良いという話をしていました。

この授業の後半に、そのような趣旨のストリートサッカーが展開されます。

参加者：この先生はサッカーの経験者ではない？

中塚：サッカーではないです。ダンスです。

映像

中塚：中学の授業について何か質問等ありますか？ こんな感じでずっと展開していきます。

参加者：女子サッカー部員はいないんですか？

中塚：いませんね。中学は。何人か良く動ける子がいるのですが、バスケ部のようですね。バスケ部の子は動けますね。

映像

中塚：ゲームの合間の相談タイムに入っています。女の子は相談が好きなので結構それぞれで盛り上がっています。ちなみにこのとき、赤青チームはゴール前に人が入れないエリアを作りました。ゴール前がごちゃごちゃするから。だからゴールをもうちょっと広げようという相談をしていましたね。相談が終わって同じ相手と、改定されたゴールでゲームになっています。いまちょうどゴール前のエリアをどうするかで相談しているところです。

映像終わり

中塚：今日、実は高校1年生の女子の授業の1回目を私もやったのですが。締めくくりはこんな感じの即席ゲームでワープしてやります。やってみて、もっとこうしたらおもしろくなるんじゃないかと思ったら、ゲームやっている人たちで相談してルールを変えていよという形で進めています。自分たちで自分たちのゲームを作っていくということが、体育の中で経験させたいことのひとつです。ありがちなのですが、部活やっている子を過剰にリスペクトする傾向があり、部員の言うことにただ従うだけという、何も考えない”大衆”になってしまう生徒が多いのですが、それではダメです。

部員も頭を柔軟にして「この人たちと楽しむにはどうすればよいか」を考えることを促しています。

3) 高校 … 「サッカー—男女で上手に“遊ぶ”ために」

引き続き高校2年生男女の授業の様子をみていただきます。普段は男女別の授業ですが、今回はいろいろみてもらいたいので、男女合同の特別授業として行いました。高3は男女共習となるのでその予習と言えるかもしれません。

この特別授業の前に一回だけプレ授業をやり、男女と一緒にサッカーをするとどうなるのかということ一度体験し、そしてメインとして半面ゲームをやるよと言っておいたんです。クラスを2つに分けて、その2チームの対抗戦です。まずは男子だけ、次は女子だけのゲーム、最後は男女ごちゃ混ぜで9対9のゲーム。ビブスを受け渡ししながらどんどんメンバーチェンジしていく形です。オフサイドありでやってみました。男女とも1年生のまとめの授業ではオフサイドルールありで副審をつけながらやっています。それを参観の先生方にも見てもらいたいと思い、やっています。

男子対抗戦の副審は、女子が全員で行います。旗を何本か渡して、ディフェンスの最終ラインをチーム全員で追いかけるのです。集団で追っかけまわしている映像です。レフェリーは私がやりながら、あぁだ、こうだと言いながら進めます。オフサイドの学習をするには、アシスタントレフェリーの仕事を体験してもらうのが一番です。ゲームを見ているときに運動量が稼げないのが一般的ですが、このやり方だと、ゲームをやっていないときでも運動量が稼げます。ダッシュの連続なので。関係ないときに旗を挙げている問題はありますけどね。

本校ではサッカー部員がたいして上手くないこともあって、遜色ないですね。野球部員だけサッカー好きの生徒とか、その連中の方が活躍したり…。

女子だけのゲームの様子です。女子もよくやります。欠席者がいて人数が少なかったので、GKは男子がやっています。1年生の必修サッカーで結構やったんです。そういうのも踏まえてこれぐらいのことができるようになっていきます。

中学の授業でやっていたのと同じようなことです。今度、男女一緒にやる時にどうすればいいかっていいような提案を募っているところです。

参加者：なんで男女混合でやるとばらせるんですか？

中塚：まとめのところで生徒からの話があります。聞いてください。

映像（女子生徒）：ボールを触ろうと思ったのですが、ボールが来たときにどっちに向かえばいいのか分からなかった。何もせずに終わってしまった。

中塚：積極的に関わりたいんだけど、関わっていいのだろうか。自分が触らない方がチームのために良いのではないかと。

映像終わり

4) 公開授業の映像を見ての質疑

中塚：研究協議で色々話も出たのですが、見ていただいたところを踏まえてご質問なり、ご意見なりいただいて、ラストもうひとネタあるのですが、意見交換したいと思います。

参加者：小学3年生のドラキュラと人間ですが、あそこで先生が、あそこ混んでるよとか、こっち空いてるよとか、指図するじゃないですか。子どもらの発想を大事にするとすると、教えるのではなく放ってあげればいいかなと思うし。逆に子どもたちが、こっち空けておいて、足の速い子をそこで活かせる、そういう駆け引きする子が出てくるんじゃないかと思いました。そこは難しいところだと思いますが。

中塚：そうですね。ついつい教師って気付いたことを言ってしまうがちですけど。あえて言わないほうがいいかもしれないですね。

参加者：その子の発想が重要な気もするし、サッカーを教えるときもそんなことを気になったりはします。

中塚：そうですね。ただ、本当に気付かない子もいるんです。気付かない子には、何らかの形で気付かせてあげたいというのがあります。そのあたりさじ加減が難しい気もします。

参加者：それともう一つ。ゴールを広げて、エリアを人が入らないようにしたのは、以前僕がここで話させてもらった、ブンデスリーガのゴール数が多いと楽しい、観てる人も楽しいし感動も大きいしってというのは、あの子たちは、当たり前と感じたのかもしれないですね。自分たちでサッカーやって、ゲームやって、あとそういうルールを決めたってというのは、やっぱりゴールする楽しみを感じていたんだと思います。

参加者：サッカーではなくて、卵割りをやるっていうのは、そっちの方がサッカーのゲームよりも楽しいということなのですか？

中塚：いや、そうではないと思いますね。例えば、休み時間に卵割りサッカーやっているかというのと、そうじゃなくて、休み時間はサッカーやっているらしいです。やっぱりサッカーはおもしろいですよ。間違いなく。ただみんなにとって等しくおもしろいかというと、それはわかりません。体育の授業のときには、みんなに等しくボールを蹴る機会を与えてあげようということで、卵割りになっているのではないかと思います。

参加者：例えば、少人数にしてやるとか。その中学生がサッカーやってないっていうのは、まさにサッカーのゲームというか、その楽しさを知らないでやっているのかなと思いましたね。

中塚：そうですね。おっしゃるとおりだと思います。変な話、サッカー協会の努力の成果か何かよく分からないけど、少年サッカーをはじめとして、体育の授業以外でサッカーをやる環境は整備されてきたと感じます。水泳も同様です。体育の授業で水泳が上手になっているかというのと、中にはそういう生徒もいますが、むしろ水泳が上手な子はスイミングスクールで上手になっている。競技者としてバリバリに泳いでいるわけではないけど、ある程度余裕のある家庭のお子さんは、子どもの頃の嗜みの一つとして、体操教室だったり水泳教室だつたりに行って、そこそこ泳げるようになっていくことが多いかなと。サッカーも似たようなところがあって、「サッカー習いに行ってます」と言いますもんね、いまどきの生徒たちは、I play football.ではないんです。

参加者：いまは幼稚園からやっているような時代だから。そうすると小学校に上がって、幼稚園から

続けている子とずっと何もやらないで体育のサッカーに取り組む子との技術の差がかなりある。そうになると、ボールに触れないとか、上手くない子は面白くないのかぁという感じはしますね。

中塚：おっしゃる通りです。僕はいつも高校生を見ているから、高校生ぐらいになると上手な子が気配りできるわけですよ。気配りできないとおかしい年代ですよ。だからそこを学習内容の柱にできるんですが、小学校の中学年ぐらいだと、上手な子とはとにかく目立ちたいでしょうし。

参加者：やっぱりフェアにならないとゲームっておもしろくないから、その辺をどうするのかなんて感じは。特に低学年のところは。

中塚：そうですね。そのジレンマの結果が卵割りサッカーになっているのかもしれないですね。

参加者：この間、キッズのイベントで、大阪でたくさんの、6歳対象でしたけど。そこでもレベルの差があって。上手い子は上手いんですけど、でもみんな楽しそうなんです。それはもう一生懸命ボールを追いかけて、あっち行ったり、こっち行ったりして、わいわい団子になってやるっていう、それだけでも楽しいのかなって。あんまり触れなくても。それはサッカーの一つの面白さなのかなって感じはしました。

参加者：自分自身の経験なのですが、私が小学校の頃、体育の授業ではボール3個でけっこうやってきました、あれは先生がなるべくボールに触れるチャンスがあるように、それで上手い子も下手な子もなるべく触れるようになっていうことが考えられていましたね。楽しかったですよ。

中塚：ちなみに今日、男子の授業の1回目をやりました。今日のテーマは「世界サッカー史を探る」でした。「ここは中世の英国の農村です。今日はフットボールのお祭りの日です」ということにして、「このボールをあっちとこっちに入れるんや、何してもいいよ」と。ボーンとボール蹴り上げてはじめます。すると、はじめる前に質問する生徒がいるんですよ。「先生、手を使ってもいいんですか?」と。「そんなもん自分で考えろ!」と言って蹴散らします。今日のゲームでは“ちゃんと”手を使ってボールを運び、ものの一分でゴールに入って。それでゲーム終了です。グラウンド真中に集めて少しばかりこちらも解説し、「また一年経ちました」と。二回やったら、そのボールを巡る奪い合いと取っ組み合いもあって。途中で危なくなっただけでやめましたけど、そういうのをやって、パブリックスクールの校庭でやっていたフットボールも再現し、最後に「ではボール三つでクラス対抗をやるよ」という感じでしめくりました。高校生ぐらいになると知的な学習も加味しながらやっていきたいなというのはありますね。

6. 高校の体育実技におけるサッカー

1) 1年男女別必修単元での実技の展開

ここからはもう少し、高校の授業の話を見せてもらいます。お手元の冊子に高校生の今回の授業の指導案と、普段はどんな授業やっているのかという、女子の17時間のサッカーの単元計画があります。男子もほぼ同じ内容で授業をします。

キーワードは「遊ぶ」ですね。男子の最初の授業は、さっきも言ったように「世界サッカー史を探る」です。ストリートサッカーから簡単なフットサルをやり、オフサイドルールのあるゲームを体験し、その合間に、例えば「自由と責任」をテーマにしながら、ポジションとシステムの話。まあこ

ういうのも全部ゲームをやりながら体験させていく形です。あるいはウイングを使うとかですね。こういうのを男子も女子も行います。こういうのを経て、さっき映像でみたようなゲームになっていくわけです。

約 15 時間のサッカー単元概要 (1 年次必修単元)

| 時数 | 月 | 日 | 曜日 | キーワード | 学習内容 | ゲーム |
|----|----|----|----|------------------------|---|-----------------------------|
| 1 | 10 | 22 | 水 | あそぶ | ボールと遊ぶ／ストリートサッカー | 4対4のストリートサッカー |
| 2 | | 24 | 金 | 世界サッカー史をさぐる (DVD講義) | 教室でビデオを用いた「サッカーの歴史と現状」の学習 | |
| 3 | | 29 | 水 | はこぶ・かわす・守る | ブラジル体操／ドリブル、フェイント、スクリーン／ストリートサッカー | 4対4のストリートサッカー |
| 4 | | 31 | 金 | つなぐ&枠ありサッカー | パスの技術・戦術／サポートと体の向き／枠ありでストリートサッカー | 4対4のストリートサッカー(枠あり) |
| 5 | 11 | 5 | 水 | 復習&フットサル導入 | 1対1→3対1／フットサルもどき | 簡易フットサル |
| 6 | | 7 | 金 | フットサルとは (DVD&実技) | VTR学習→フットサル | フットサル |
| 7 | | 12 | 水 | フットサル大会 | クラス対抗でフットサル大会 | フットサル |
| 8 | | 14 | 金 | 浮き球の処理 | クッション&ウェッジコントロール／ヘディング ／半面サッカー(ヘディングで1点) | 半面サッカート(ヘディングで1点) |
| 9 | | 19 | 水 | オフサイド① | オフサイドの理解と副審の仕事 | 半面サッカー(オフサイドあり) |
| 10 | | 21 | 金 | オフサイド② | オフサイドの攻略法と活用法 | 半面サッカート(オフサイドあり) |
| 11 | | 26 | 水 | 自由と責任 | ポジションとシステム／責任を果たした上での自由な判断 | 半面サッカー(役割分担ゲーム&全員攻撃全員守備ゲーム) |
| 12 | | 28 | 金 | バランス (ウイングを使う) | 前後左右のバランス／両サイドのウイングを使ったゲーム | 半面サッカー(ウイング安全地帯ゲーム) |
| 13 | 12 | 3 | 水 | リーグ戦① | 4チーム総当たりリーグ戦第1日 | 半面サッカー(オフサイドあり) |
| 14 | | 5 | 金 | リーグ戦② | 4チーム総当たりリーグ戦第2日 | 半面サッカー(オフサイドあり) |
| 15 | | 6 | 土 | リーグ戦③ | 4チーム総当たりリーグ戦最終日 | 半面サッカー(オフサイドあり) |
| 16 | | 10 | 水 | みるスポーツ (DVD講義) | 教室でビデオを用いた「みるスポーツとしてのサッカー」の学習 | |
| 17 | | 12 | 金 | 予備 | 予備 | 全面サッカー(?) |

2) 「みるスポーツとしてのサッカー」の学習

ところどころ「DVD 学習」があると思います。15 時間も授業をやっていると 2 回ぐらいは雨が降るんです。雨のときに教室で、「みるスポーツとしてのサッカー」を学習します。もちろん「する」楽しさを味わってもらいたいのがまずあるのですが、はっきり言って彼ら彼女らが、学校を卒業してからもプレーヤーとしてサッカーに関わることは、学校に通っているころほどは多くはないでしょう。それ以上に多くなるのが、観客として、あるいは支える存在としてサッカーに関わることではないか。

しかしあまりにもゲームの見方がわかっていない。それはルールのことだけでなく、ゲームの背景も含めてです。もっとここを見たら、こういう見方をすればおもしろいのに、というのを、雨が降ったときの映像学習でやっています。今日は授業で使う映像も持ってきているので、見ていただこうと思います。

映像

使う映像は古いのですが…。1986年ワールドカップ準決勝の西ドイツ対フランスです。こういうのをパッと見せると「短パンが短い」ところに生徒たちは反応するわけです。そこでまずはうんちくを述べるわけです。例えば、ピッチ上で繰り広げられているのがサッカーの試合だけど、(西)ドイツとフランスという、「国境を接したこの両国が試合をやっている意味を考えてみよう」など、こういう映像を見ながら補足しつつ、サッカーの国際試合の意味を考えてもらいます。男子も女子も同じようにやっています。

この映像では、実はオフサイドについてわかりやすい場面が出て来ます。この頃のテレビ画面では珍しく、真横からの映像があるんです。授業中にアシスタントレフェリーをやっているの、生徒たちも副審目線でわかります。「ああそうか、これがオフサイドなんだ」と。この一連の映像は、みるスポーツとしての学習映像として私が勝手に作ったシリーズです。オフサイドシリーズなんです。

映像

これは四年後のイタリア大会の、また古いですね。三位決定戦。イタリアとイングランド。これもやっぱりうんちくを語るところからはじまります。イタリアで行われた大会で、イタリアが三位決定戦に回っている。このイタリアとイングランドのそれぞれフットボールの母国としての意地をかけたゲームなのだ。試合はもうほとんど終わりかけています。後半45分。解説は松本育夫さんですね。2-1でイタリアがリードのまま終わろうとしているところです。ここでイタリアが追加点を挙げたかに見えましたが、オフサイドです。生徒たちもこの映像を見ると「あれっ？」となるわけです。蹴った瞬間のプレーヤーの位置が問われるのですが、ヘディングした選手はオンサイドです。「オフサイドの反則だと思う人」と尋ねると、誰も手を挙げません。これはミスジャッジだと。でも「違います。これはオフサイドの反則です」と。えーって生徒たち言うんですけど、「なんでかわかる人」と聞いてみると、一人ぐらい気付きます。「レフェリーがそう言ったから」と。そこでレフェリーとは、という話が始まるわけです。

もともとはプレーヤー同士がセルフジャッジでやっていた。揉め事が起きたときには両チームのキャプテンが、のちには両チームの代表者が相談して判断していた。けど最終的に、第三者にReferするようになる。全てを「委ねる」。Referされた人のことをRefereeと言うのだ。だからサッカーにおいてはレフェリーの決定が最終である。解説者は安易に「これは間違いですね」と言うけど、そうではない。レフェリーの判断がすべてであるということをきちんと言わないといけない。「解説者のたわ言に惑わされるな」ということを学習します。でも松本育夫さんには言えないな(笑)。

映像

さらに四年後です。94年アメリカ大会のベスト8決めのところ。ブラジルとオランダ。前半0-0だったけど、後半5点も入ったゲームです。そろそろこの映像がオフサイドシリーズだっていうことがわかっているから、このロマーリオの得点も「あやしいぞ」と思って生徒は見ています。けどこれは、後方からの縦パスをベベットがオフサイドギリギリを抜けているし、サイドからのクロスをボールの後ろから走りこんでいるので、素晴らしいゴールですね。

映像

そして次の得点シーンです。素人の高校生は、特に女の子は、ゴール後のパフォーマンスで盛り上がるわけです。「この一連のシーンで、ゆりかごシーンが気に入った人」って聞くと、「はい」って。

「じゃあキーパーをかわしたところが気に入った人」って聞くと、それも三分の一ぐらい手を挙げます。「じゃあオフサイドギリギリで抜け出た、きわめて頭腦的なプレーが気に入った人」って聞くと、「えっ?」と言ってきょとんとしているわけです。大多数の子が気付いていないのです。

そこで解説します。皆さんすでにご存知だと思いますが、この瞬間、画面外で起きていることを想像しながら見ようねということです。後ろから二人目のオランダのプレーヤーがここにいます。点を取ったベベットはオンサイドの位置。だけどその向こうにいるロマーリオが明らかにオフサイドポジションです。しかしロマーリオは、わしゃ知らんで、とばかり歩いて戻ってきます。だから、オフサイドの位置にはいるけど反則ではない。きわめて教育的価値の高いシーンです。この映像では先ほどの映像とは異なり、解説者も実に良い。きちんと補足説明してくれています。ということで、「良い解説者の声には耳を傾ける」と。

通常の映像でもう一度見てみると、「ああそうか」になるのです。「サッカーのゲームはいつ何が起きるか分からないから、絶対にトイレに立ってはならない」ということと、「画面外も想像し続けろ」とってことですね。

映像

次は日本が初めてワールドカップ出場を決めた試合です。このゲームの映像の中にも画面外を想像してもらいたい場面がいくつかあります。この場面は、オフサイドの罠にかけようと、日本がバックラインを上げているシーンです。これもストップして説明します。ほかにもありますが、ここでは省略。そして最後のゴールシーンは、やはり日本人として知っておいてもらいたいですね。ちなみにこれもめちゃくちゃマニアックな個人的エピソードですが、2006年からうちの学校はシンガポールの学校と交流を始めて、その初回に私は引率で出かけました。間に日曜日をはさみ、その日はこちらも休日になったので、マレー鉄道でシンガポールから一駅乗って隣のジョホールバルに行き、そこでタクシーの運ちゃんと交渉してこのスタジアムまで実際に行ったのです。タクシーの運ちゃんはもちろんこの試合のことをよく覚えていて、会場にはこの試合のときにもいた管理人のおじさんがいて、「いやーあの試合はすごかったぜ」という話をしてくれました。この競技場、ロッカールームからピッチへ出て行く通路には、この試合の写真がまだ貼ってありました。2006年の時点で、こんな話を混ぜながら、映像を続けます。

この試合で負けたイランは大陸間プレーオフに出場し、オーストラリアに勝って本大会出場を決めたのですが、オーストラリアはせっかくオセアニアのチャンピオンになってもよく大陸間プレーオフで負けてしまう。それが嫌になってアジアに引っ越しましたという話も生徒にはします。

映像

今までの映像とは異なるタイプの映像がここから出てきます。これはあるテレビ局が試験的に作成した映像です。サッカーというスポーツの全体像は、なかなかテレビ画像に映し出すことはできません。この映像は、サロン 2002 の仲間から入手したのですが、日産スタジアムのこけら落としとなる、日本と韓国のゲームです。手前と奥のタッチラインが必ず画面に入るようにして、韓国がボール持っていたら日本の最終ラインが画面の端に入るように、逆に日本がボールを持っていたら日本の最前線が画面の端に入るように、引いた映像で撮ってあります。ボールはときどき画面から消えてしまうけど、全体がどうなっているのかがわかるというものです。通常のテレビ画面だとボール周辺をガッとクローズアップするだけだけど、実際は11人と11人がこんな感じで動いているんだと。

どこを見てもいいんだということを伝えます。チケット代を払って競技場に行き、タッチラインの

横に座るとこんなふうに見えるということを説明します。

映像

次の映像はまたマニアックです。競技場に行ったらどこを見てもよい。例えば、一人の選手をずっと追いかける見方もあるんだと。

これも古い映像です。92年、Jリーグが始まる前のトヨタカップ、バルセロナとサンパウロ FC の試合です。当時、JFA 科学研究委員会の仕事で撮った映像が巡り巡ってうちの学校の体育の教材になっています。バルセロナの左サイドのフォワード、ストイチコフをずっと追いつけた映像です。マークも厳しいからほとんどボールには触れません。けど虎視眈々とチャンスをうかがっています。これをみると、一人の選手がボールをもらうためにどんな工夫をしているのかがわかります。

試合中、どこをみてもよいのだ。こうやって見るのも面白いということです。画面上にボールはほとんどありません。どこかにあります。何かが起きているわけです。指示を出したら、要求したり、得意の左でボールを触って、蹴った、入った、みたいな、これも一つの見方だと。

じゃあフォワードではなく、ディフェンダーを見続けたらどうなるんだっていうのが次に出てきます。これは93年の、やはり同じトヨタカップで、ACミランのフランコ・バレージをずっと追いつけた映像です。一つの意味で動いている AC ミランのバックラインが画面に入って非常に面白いのですが、ちょっと時間がないので…次に行きたいと思います。

映像

ラストです。同じ場面を異なる角度で見たらどうなるかというものです。2002年のワールドカップ決勝戦です。まずは通常のテレビ映像です。ロナウドの2点目、有名なゴールシーンですね。通常映像では、リバウドのスルーが効きましたねっていう、そういう話です。

けど別の角度で見たらどうなるのでしょうか。この大会ではスカパーがゴール裏にカメラを置き、「タクティカル映像」として放送していたものがあります。さっきと全く同じ場面で、解説の音声も一緒です。ゴール前のスルーは、もちろんわかりやすいシーンですけど。そもそも数的優位がどこから生まれたのかがわかります。右サイドバックのカファーがハーフライン付近で、ドイツの選手に走り勝っているわけです。ここで数的優位が生まれて、ちょっとずつずれているところを、サッカー観戦の達人は見きわめるのだと。

他にも色々あるのですが、21時になりましたのでこれで終わります。本当はもっと意見交換したいのですが、場所を変えてやりましょう。

ありがとうございました。

続きは懇親会で